

## 経済学と社会

### 『日本における女性と経済学——1910年代の黎明期から現代へ』へのコメント

金野美奈子（社会学・東京女子大学）

バラエティに富んだ諸論考とオーラルヒストリー的な素材を盛り込み、圧倒的なスケールの大きさと女性と経済学の20世紀を描き出す試みに、心から敬服する。本書から多くのことを教えられた。みなさんとシェアしたい論点は数えきれないが、ここではごく限られた論点についてのみ、いくつかコメントさせていただく。

#### 1. 女子経済学教育開始の文脈——キリスト教と社会主義

山川菊栄の2つの論文「女性の観たる女の問題」と「与謝野、平塚二氏の論争」が発表された1918(大正7)年に……東京女子大学が設立され、そして、同大学に経済学が授業科目として設けられ、日本において初の女性に対する経済学教育が始められたのである。(松野尾論文, p.17)

わが国の経済学教育、とくに女子高等教育開始の文脈には、社会主義とキリスト教が大きく関わっていた。社会主義の方にもいろいろややくい事情はありそうだが、個人的にはより直接の背景として東京女子大学という「キリスト教系」大学で女子経済学教育が始められたことが注目された。キリスト教と経済学、この両者は一見して、相反するものにみえないだろうか。もちろん、それは「キリスト教」と「経済学」をどのように理解するか次第かもしれないが、ごくラフにみて、経済的利益を求める活動に対しては慎重姿勢を少なくとも表明してきたキリスト教的世界観のなかに、経済学という学問はすっきり包摂しにくいもののようにも感じる。

経済学教育の最初の間となった東京女子大学実務科の設置は、主に新渡戸稲造のアイデアだったようなので、これはやはり新渡戸のバックグラウンドが関係しているのではないだろうか。新渡戸は1880年代半ば、ジョンズ・ホプキンス大学留学時代にクエーカーとなった。クエーカーはキリスト教諸派のなかでも、実業界とのつながりが強いことで知られる教派だが、一方で、積極的な社会事業活動を行う女性を前面に押し出し、ある種のバランスをとろうとしている点でも特徴的である。新渡戸の東京女子大学は、基本的にこのような「クエーカーモデル」をベースに構想されたもののようにみえる。その後の日本の歴史の中で、新渡戸が礎を築いたクエーカー人脈が果たした役割の大きさを思うとき、このことの意味は意外に大きいのではないだろうか。

#### 2. 社会の「経済学化」

経済学教育は「女性が旧来の隷属的な状況から脱し、『新しい時代の主体』として生きるために必要とされた」(栗田論文, p.43)

女子経済学教育の創始という出来事は、さらに踏み込んだメッセージを発したはずである。それは、『『新しい時代』には経済学的なものの見方が重要なのであり、そのような見方ができることこそが『新しい時代の主体』となることなのだ』というメッセージである。このメッセージはその後、主に女性経済学者が推進力となった「社会の経済学化」ともいえる流れにつながっていく。

経済学という学問、ないし経済学的なものの見方が、たんに現実を知るのに役立つというだけでなく、まさに私たちにとっての現実を生み出すという積極的な役割を果たしたことは、森本厚吉の効率的な生活標準論（本書生垣論文）から大河内一男らによる戦時国民生活論に至る系譜にも見て取れるようにも思う。これらの諸研究・論考はたんなる実態把握ではなく、生活とはどういうものか、何をすることが生活なのかを、消費、貯蓄といった貨幣経済的タームで理解する仕方を、社会に対して提供した。その中で、「生活」というものが何か独立した論理をもつものとして、社会的意味世界のなかに位置づいていったようにみえる（金野 2013）。

経済学による社会変革への決意は、日本における家事経済学の創始者、松平友子の言葉にもみることができる。

今日列国を通じて日本国民程無駄な生活を好み、みえを張りたがる国民はないと称されて居る。物が無くても有る風をしたがり、どんな場合にも世間体をつくるはねば気が済まない。〔収入が〕有れば有るに任せて物を買はねば承知が出来ず、無ければ直ぐに親戚知友の下に泣付く。友人の面倒を見るのが恰も先輩旧知の義務であるかの如く心得、無心を云ふのを何とも思つて居ない者も少くない。独立自尊は文明国民の根本条件であるのに、何と云ふ心細いことであらう。（松平知子『家事経済学』1925年、本書 p.101-2）

松平が「倫理的、道徳的な生活」と言うとき、それが経済合理性——それがどう理解されるのであれ——にかなった生活という意味だとすれば、松平がそう主張した意味を、私たちはどう受け止めればよいだろうか。

### 3. 「女性解放」の理念が果たした役割

栗田論文からの上の引用にも示唆されているとおり、経済学的世界観の普及過程は「女性解放」のメッセージによって後押しされていた。しかし、ここにも、同時代の女性解放のメッセージが、社会の現状から出発したというよりも、「女性を隷属したのとして理解する」見方を社会に対して提供したという側面との重なりが見え隠れする。

当時の女性は、はたして「隷属」していたのだろうか。これも大雑把すぎる問いではあるが、たとえば江戸末期から明治初期に日本を訪れた外国人による観察記録は、興味深い素材を提供している。彼らがみたものは、アジアの未開国でみじめな隷属状態にある女性たちではなかった。自らの前提を覆される経験を柔軟に受け止め、記録したのはしばしば女性である（cf. 渡辺 2005）。いずれにしても、「女性と経済学」初期に、女性解放というメッセージが社会の経済学化という流れを下支えしていたひとつの重要な要素だったようにみえることは、考えさせられる。

その点では、その後の女性と経済学における一連の動きも、ある意味では社会の経済学化を側面支援したといえるのかもしれない。竹中は「経済至上主義に立つ 20 世紀の労働を“レイバリズム”と呼んでディーセント・ワークを唱えるが（竹中論文、p.225）、このような主張の意味は十分に理解できるし大切な価値観だとは思いますが、私たちの視野をますます賃金労働のあり方に集中させるという意味では、広い意味での「レ

イバリズム」を後押ししてしまっているとみることもできよう。同じことはコンパブル・ワースを求める動きにも、さらに、社会の経済学化の文脈ではアンペイド・ワーク論やアンペイド・ワークの貨幣評価などにも、同様のことを指摘できるだろう。

これらはもちろん、「現実」を受け入れたうえでのプラクティカルな戦略である。その意味での重要性を否定する意図は毛頭ない。しかし、「男女平等」を求める動きによって、本当に重要な問題から私たちの目がそらされるという構図——これはもちろん、すべての人が社会の一員にふさわしく遇される社会という理想が無意味だということではなく、むしろ逆であるが——がますます明らかな今日的視点からみると、きわめてアンビバレントに受け止めざるをえないというのが正直な思いだ。

このことを、個人的には竹中個人が裏打ちしたと読めた一文がある。

男性でジェンダーの分析をやってくれる人がいればいい。(竹中・村松対談における竹中発言, p.277)

この一文を読んで、本書を読むなかで最も衝撃を受けたと同時に、竹中が本当に闘っていたのは社会の不公正でも女性差別でもなく、自身のなかの男性優位主義だったのではないかという思いを抱かずにはいられなかった。

#### 4. 新たな道標

いずれにしても、本書を読んで感じたことは、20世紀日本社会の経済学化の動きを考えると、家庭に経済学を持ち込んだ、ないし家庭をみる枠組みを経済学の目で構築しようとした女性たちは、学問の主流から無視された傍流などではなく、実は、社会のひそやかな最先端を担っていたといえるのではないかということだ。

家庭・家族から市場、国家、さらにはグローバルな局面までを含む社会全体を経済学の視点によって一元的に理解／構築するという試みは、たとえば、政治学がリベラルな市民間関係として社会を一元的に理解／構築しようとする試みと似たようなところがある。いずれにも、私のような者の目からみると、共通する問題を抱えているように見える。それはより包括的な人間関係として、社会を理解／構築する視点とのかかわりである。社会の中で生きる私たちがもっている、経済的存在とは異なる側面、市民的存在とは異なる側面について、これらの学問はどのように考えるのだろうか。

もちろん、経済学や政治学は、社会的世界の全体理解をめざしているのではなく、経済学的、政治学的側面に特化して社会を把握しようとしているだけだと言われるだろうし、たしかにそうなのだろう。しかしやはり、自分たちにみえていない世界を諸社会科学がどのように想定しているのかは気になる論点である。社会的世界を経済の言葉で表現することは、現代では当たり前になった。人間関係や人間身体も含め、あらゆることを「資本」と捉え、投資とリターンのモデルで理解することがこれほど普及した社会（しかもそのような視点が評価されてノーベル賞まで授与される！）を目の当たりにするとき、私自身は、たとえば、経済学やリベラリズムの目を通して構築された「家庭」から逃れる家庭のリアリティを積極的に救い出していく営為が、社会科学の重要な課題のひとつではないかと考えている。※

家事経済学を創始した松平友子はもちろん、この問題に気づき、きわめて重要だと考えていたと思う。次のような言葉からも、それはうかがえる。

家事は有償か無償かっていう問題を考えることで、先生はこれに苦労されましたね。……女の人が働いて無償ってことをお友達に話したら、奉仕と犠牲の精神、それだから尊いのも主婦は、って言われたっておっしゃるんですね。愛情をもってやれば、喜んでもらえれば一番いいんだ、奉仕の精神で行きなさいっていわれて、私は考え込んだっておっしゃったんです。……それはずっと考えているのよっておっしゃってましたね。(亀高京子「回想 松平友子先生と私」, p.160)

このような「奉仕と犠牲」の理念(それ自体、近代の脚色がかかり入っているだろう)がいかに問題のある状況を生みうるかを、ここで繰り返す必要はないだろう。だが、その後の経済学がともすれば、松平のこの戸惑いのある意味では切り捨てる方向へと進んでいったようにもみえるとき、これは無視しえない瞬間にみえる。女性と経済学の出会いを形にした、この聡明な一人の女性が立ち止まった地点から、現代の私たちはもう一度、オルタナティブな展望を開いていくことができるかもしれない。

※注 公平のため言い添えれば、社会学もまた、別の側面からではあるが、「社会の社会学化」といえるかならずしもポジティブとばかり言えない動きを(そうとは意識せずに)担ってきたという面がある。これらのことを考えれば、私たちは20世紀において社会諸科学が果たしてきた役割の光と影について、学問の枠を超えてもっと共通の議論をしていくべきなのかもしれない。

#### 文献

金野美奈子, 2013, 「〈生活の論理〉と〈処遇の論理〉——男性ホワイトカラーにおける近代家族モデルの歴史社会学」『東京女子大学 社会学年報』1:32-48.

渡辺京二, 2005, 『逝きし世の面影』平凡社.